

「ワリ期のインタラクションについて」

渡部森哉（南山大学）

ワリ期はペルー中部高地南部のワリ遺跡を首都としてワリ帝国が台頭した時期とされる。一方で、ワリ帝国モデルを批判する立場も 1980 年代から多く認められる。帝国モデルを批判する研究者の多くが用いるロジックは、在地発展、インタラクションである。前者は、在地社会のリーダーが時にはワリの権威を利用するために主体的にワリ様式の遺物を導入した、交易によって獲得し、威信材として用いたという考えである。時にこうした説明にはエイジェンシーという概念も導入される。後者は、各地の諸社会間で例えば経済的要因で交流が発達したことからワリ様式の遺物が各地に広まったという説明であり、ワリ様式の遺物だけではなく、他の様式の遺物も広範囲に広まっていることが論拠としてあげられる。そしてこれら 2 つの説明は排他的ではなく、両立可能である。

インタラクションの定義にもよるが、ワリ期に地域間で物資や人の移動があったと予想されることは確かである。本発表では、一体ワリ期のインタラクションとは一体どのような性格を有するのかを発掘データから考察することを目的とする。事例としてペルー北部高地を取り上げる。

発表者が 2006 年に発掘調査を実施したパレドネス遺跡では、チュルパという地上式塔状墳墓に共伴して外来と考えられる様式の土器が多く出土した。しかしワリ様式の多彩色土器は出土していない。同様の状況を示す遺跡として、カハマルカよりも南のカリエホン・デ・ワイラス盆地のイチク・ウィルカワイン遺跡がある。そこでもチュルパに共伴して多様な土器が出土している。こうした状況がはたしてワリ帝国の支配下で生じたのか、あるいはそうでないのか、また支配下にあったとして遺跡ごとにどのような違いがあるのかを考察する。カハマルカではワリ帝国の行政センターと考えられるエル・バラシオ遺跡がある。一方でカリエホン・デ・ワイラス盆地では、こうした行政センターは見つかっておらず、以前からワリの遺跡とされてきたホンコパンバ遺跡は、チュルパが主体となる遺跡である。こうした各地のセンターの性格の違いが近隣の同時代の遺跡の状況を説明するポイントの 1 つとなる可能性がある。

「コトシュ遺跡第5次発掘調査ーミトの神殿とチャビンの神殿ー」

鶴見英成（東京大学）

セサル・サラ（ペルー・カトリカ大学）

1960年代に、ペルー共和国ワヌコ県のコトシュ遺跡において、東京大学アンデス地帯学術調査団が発掘したKTマウンドは、アンデス文明形成期の編年研究において、重要な意味を持っていた。それは、形成期早期（ミト期）・前期（ワイラヒルカ期）・中期（コトシュ期）・後期（チャビン期）・末期（サハラパタク期）と、形成期の全期間にわたる建築が重なり合っており、さらにその後の地方発展期（イゲーラス期）の層でパックされているという、編年的序列のすべてを層位的に内包した、希有なマウンドであったためである。ただし当時の放射性炭素年代測定には技術的な限界があり、絶対年代の分析は精度に課題を残したまま終わった。

発表者は2016年にコトシュ遺跡の再発掘を実施し、とくに土器導入に先立つ形成期早期の年代測定を最優先課題に据え、神殿と考えられているミト期の部屋状建築を複数発掘した。次いで2017年に、コトシュ同様に全ての時期の堆積を持つハンカオ遺跡（ワヌコ県）を発掘して、双方を比較しながら、最新のAMS法を用いた放射性炭素年代測定によって、高精度な編年を構築中である。そして2018年9月現在、コトシュ遺跡にてデータの追加収集を図っているが、その主目的はミト期建築相互の層位的な序列の解明と、土器導入後の建築に伴う年代測定試料の採集である。今回の発表ではとくに建築の形態とその変遷、出土した特徴的な遺構や遺物について報告する。とくに2016年にほとんどデータの取れなかったチャビン期について、床下に幼児埋葬を伴う部屋状建築など、建築の形態とその変遷の解明が進み、1960年代に発掘された部分と合わせて、神殿と考えられる大規模建築の全容が見えてきている。なお発掘は11月まで継続予定であり、2016年にやはりデータ収集の不十分であったサハラパタク期についても、1960年代に発掘された居住域の周辺を調査する計画である。

「パコパンパ遺跡における土器以外の人工遺物の時期変遷」

荒田 恵 (国立民族学博物館)

関 雄二 (国立民族学博物館)

フアン・パブロ・ビジャヌエバ (ペルー国立サン・マルコス大学)

ディアナ・アレマン (ペルー国立サン・マルコス大学)

マウロ・オールドーニェス (ペルー国立サン・マルコス大学)

ダニエル・モラーレス (ペルー国立サン・マルコス大学)

これまでの土器分析の結果から、形成期におけるパコパンパ遺跡の利用は、形成期中期に相当するパコパンパ I 期（紀元前 1200 年から紀元前 800 年）と形成期後期に相当するパコパンパ II 期（紀元前 800 年から紀元前 500 年）の 2 つの時期に分けられている。また、発掘調査によって明らかになった建築物の改築および改修の過程から、これら 2 つの時期はさらに細分され、それぞれ IA 期と IB 期、IIA 期と IIB 期と名づけられている。

これまでに、建築および土器の分析から、パコパンパ遺跡における各時期の活動の特性が論じられてきた。また、土器以外の遺物、すなわち石器、骨角器、土製品および金属器の分析から、同遺跡において石製玉製品の製作、骨角器の製作、紡織および冶金などの生産活動が行われていたことも明らかになっている。そこで本発表では、土器以外の遺物の器種構成比率を時期毎に比較することで、それぞれの時期に行われた活動の特性を把握することにした。

その結果、特に IB 期、IIA 期および IIB 期で、以下に示す主要な変化がみられることが明らかになった。IB 期からは土製紡錘車、埴埴片および骨製の幻覚剤の吸引具が出土するようになり、特に幻覚剤の吸引具に関しては、その未製品を含めてこの時期の出土点数が最も多くなる結果になった。続く IIA 期で幻覚剤の吸引具は減少するが、石製玉製品の未製品の出土比率が増加するほか、金属製品が出現し始める。そして IIB 期では、再び幻覚剤の吸引具の出土量が増加し、金属加工用の金属器が一定量出土し始める。さらに、石製品の未製品、埴埴、金属製針および土製紡錘車についても、その出土比率が大幅に増加する傾向が確認された。

このような各時期の特徴は、冶金、紡織、石製品の製作などの生産活動、および儀礼活動と関連していると解釈できる。最後に、これらの変遷の特徴と、これまでに論じてこられた活動の特性との関連性について展望を示してまとめとする。

「カンパナユック・ルミにおける円形半地下式広場の発見とその意義」

松本雄一（山形大学）

ユリ・カベロ（ペルー国立サン・マルコス大学）

発表者はペルー中央高地南部に位置する形成期神殿、カンパナユック・ルミ遺跡において2007年から調査を行っている。同遺跡においては絶対年代データと土器様式の分析を通じて遺跡編年が確立しており、形成期中期から後期にかけて（紀元前1000-紀元500年）地域間交流の結節点として発展したことが明らかとなっている。2016年度と2018年度の考古学的調査においては、基壇の建築プロセスの解明を目的として中央基壇に焦点を当てた発掘調査を行ったが、調査の過程で同地域では類を見ない円形半地下式広場の存在が明らかとなった。この広場は地山を円形に掘りこんで作られており、その直径は約14mでその東西に扇形の階段が配されている。本発表においては、この新たなデータに関して、三つのレベルから予備的な考察を行う。

一つ目は、遺跡レベルでの考察であり、これまで明らかとなったカンパナユック・ルミの中央基壇の建築プロセスの中に円形広場がどのように位置づけられるのかを考察し、建築シークエンスの精緻化を試みる。同広場が遺跡の建築プロセスの中で比較的早い時期に建造され、建築の推移直方向への拡大の際に終末儀礼（Termination Ritual）を通じて封印されたことを指摘し、建築開始と封印がそれぞれ遺跡編年のなかにどのように位置づけられるのかを仮説的に考察する。

二つ目は、地域レベルにおける他遺跡との比較である。この場合はペルー中央高地南部に焦点を当て、同時代の遺跡との比較を行う。カンパナユック・ルミの基壇の建築プロセスが地域の建築伝統に根ざしたものである可能性を論じ、今回の発見が円形広場としては同地域で唯一の事例となることを指摘する。

三つ目は、地域間レベルでの遺跡間比較である。カンパナユック・ルミの円形広場と同時期の広場は、チャビン・デ・ワントルやクントウル・ワシをはじめとするごく一部の重要な遺跡にのみ存在することを指摘し、いわゆる「チャビン問題」を考える際に円形広場がどのような意味を持つのかを論じる。

「メキシコ国民によるメキシコ先スペイン期遺跡の捉え方と活用の変遷」

渡辺裕木 (国立民族学博物館)

本研究は、現在におけるメキシコ合衆国民の多くが、同国内の先スペイン期遺跡に認める意味、価値、印象、イメージなどを明らかにし、一般的な遺跡の捉え方を理解することを目的としている。現在メキシコの先スペイン期文化の遺産は、高い学術的関心の対象であり、多様な分野、領域において研究が進められると同時に、多くの遺跡が重要な観光資源として開発されている。また、政治的示威行為の象徴としての役割を担う事もあり、遺跡は、開発や利用を企画する主体によって、学術的価値、経済的価値、象徴的価値といった異なる価値づけが為され、資源化されることが指摘されている。このような状況を認識した上で、遺跡の一般公開の一義的な目的を学術的知見の伝達として、2013年から2015年にかけて、テンプロ・マヨール遺跡（メキシコ市）の解説パネルの利用状況を調べるアンケート調査を実施した。その結果、解説パネルの具体的な問題点に加え、メキシコ国民が、先スペイン期の文化や遺跡に対して、見学する際に先入観となり得る印象あるいはイメージを持っていることが推察された。

メキシコ国民の先スペイン期遺跡の捉え方は、彼らが育った社会的背景に影響を受け形成されると考え、本研究では、歴代為政者の意向が反映している、20世紀の初等中等教育で使われた歴史教科書の内容を精査し、掲載された遺跡の画像および解説の特徴を分析する。また、歴代教科書の中で最も頻繁に言及された4～6か所の異なる地域の遺跡を対象に、発掘調査、遺構の復元、開発などによる遺跡および周辺空間の変化を分析し、20世紀の遺跡に求められた価値と活用の変遷を明らかにすることから、メキシコ国民による遺跡観の変遷とその背景の関係を明らかにする。

発表では、現在までに収集した歴史教科書に掲載された遺跡画像の分析の進捗状況と、テンプロ・マヨール遺跡とその周辺の空間分析の結果および、本研究の今後の展望を報告する。

「メキシコ中央高原における国家形成と環境変動」

福原弘識（埼玉大学）

原口強（大阪市立大学）

大森貴之（東京大学）

米延仁志（鳴門教育大学）

メキシコ中央高原における国家形成プロセスを実証的に解明するためには、強大な国家が形成されたテオティワカンとメキシコ盆地だけでなく、テオティワカンと同時期に発展した近隣諸都市や、先行社会の形成プロセスを理解することが重要である。

従来テオティワカンの発展と人口増加は、A.D.200年前後に起きたとされたシトレ火山噴火とメキシコ盆地南部諸村落の放棄に伴う人口移動によって説明されてきた。被災地から遠く、社会基盤が整備されつつあったテオティワカンへ人々が移動したとされてきた。

しかし近年の年代測定技術の進歩によって、A.D.50年頃に起きたポポカテペトル火山噴火がメキシコ中央高原の社会変動に対してより大きなインパクトを与えたことが分かってきた。この火山噴火が、火山北西側のメキシコ盆地人口をテオティワカンへ、火山東側のプエブラ盆地人口をトラランカレカや Cholula への人口移動の引き金となった。これは Cowgill がテオティワカンでおこなった人口動態調査にも一致する。彼によればテオティワカンでは 100 B.C.年から A.D.1年までの期間に約2万人だった人口が A.D.100年までに6~8万人へ急増したとされる。またメキシコ盆地人口の80%がテオティワカンに集中したという Sandars らの調査とも一致する。

プエブラ盆地の場合はポポカテペトル火山の影響が広範囲に及び、盆地人口の30%が減少したが、被災を免れた Cholula に盆地人口の大半が流入した。またトラランカレカでもこの時期に人口増加と都市域の拡大が見られる。

人口移動の全ての要因を自然災害に帰することはできないが、国家成立直前のメキシコ中央高原社会が不安定な自然・社会環境を背景としていたことが明らかになってきている。

本発表では、火山活動とその影響範囲、その間の環境変動史と社会的影響を明らかにすることを目的に、2017年夏に主にメキシコ中央高原東部でおこなった踏査、および2018年春におこなった湖辺ボーリング調査の概要について報告する。

「チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区出土7バクトゥンの日付のある石碑」

伊藤伸幸(名古屋大学)

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区において、2012年から現在までに、先古典期編年の確立のために名古屋大学が考古学調査を実施してきた。同時に、紀元後4～6世紀に噴火したサンサルバドル市近くのイロパンゴ火山の巨大噴火の影響も火山灰編年学の視点から調査してきた。このイロパンゴ火山に埋もれた状態で“様式化されたジャガー頭部石彫”2基が、チャルチュアパ遺跡最大の建造物 E3-1 階段前から出土した。これらの石彫は先古典期後期の石彫であることが層位等から明らかになった。

一方、この調査では、同時に地下レーダー探査を実施し、先古典期文化における石彫の配置などから、石彫文化の解明にも努めてきた。その結果、E3-1 建造物の南側から、石列が東西方向に伸びており、この建造物と関連した施設であることが推定された。また、石造建造物の一部と考えられる石壁も検出された。そして、地下レーダー探査の結果を再分析した結果を基にフラスコ状ピットの位置を推定した。発掘調査では、推定された位置からフラスコ状ピットが検出され、地下レーダー探査の有効性が明らかにされた。

先古典期における石彫文化を明らかにするために、E3-1 建造物の南に位置する3基の建造物、E3-2, E3-3, E3-4 建造物の南側でも2015年に地下レーダー探査を実施した。その結果を基にして、2015年から現在まで考古学調査を実施した。2018年3月、E3-2 建造物の南側から7バクトゥンの日付を持つ石碑の破片が出土した。

7バクトゥンの日付を持つ石碑は、メソアメリカで数例しか知られていない。また、メソアメリカ南東端では文字を持った石碑はチャルチュアパ遺跡のみで出土していない。以上ことから、この石碑破片はメソアメリカ文明の文字文化若しくは石彫文化を解明するうえで非常に重要である。本発表では7バクトゥンの石碑が出土した2018年春の発掘調査について報告する。

「ニカラグア太平洋岸の後古典期—マナグア湖畔の発掘調査から」

長谷川悦夫（埼玉大学）

発表者は2014年からニカラグア太平洋岸のマナグア湖畔の2つの遺跡で発掘調査を行ってきた。まずチラマティーヨ遺跡では、居住跡と考えられる地点で試掘を行い、土器片、石器、動物依存体などのサンプルを採取、炭化物からC14年代を測定した。結果として、従来の土器編年で設定されたサポア期(後800-1350年)とオメテペ期(後1350-1550年)と呼ばれる、メソアメリカ後古典期相当の二つの時期に時代的前後関係は認められないことを確認した。これは、すでに2000年代初頭から、当該地域の最大の淡水湖であるニカラグア湖周辺の遺跡の発掘調査により提唱されていたことの再確認である。ただし、ニカラグア湖周辺の遺跡でのC14年代測定ではオメテペ期は後1200年には終わるとされていたのに対して、チラマティーヨでは1300年代のC14年代が得られた。また、チラマティーヨの出土品からは、石器製作と漁労に従事する生活様式が推測された。

続いて発掘したラ・パス遺跡では方形の石造基壇を確認した。この建築はメソアメリカ的文化要素であり当該地域では極めて稀である。一連のC14年代は後1046-1280年であり、サポア期およびオメテペ期に相当する。ただし、この方形の石造基壇は小規模で、上部構造は有機質の材料と推測され、大量の石と土砂で埋められて、円形マウンドに造り替えられている。

チラマティーヨでも、ラ・パスでも、トウモロコシ農耕にかかわる遺物は出土せず、黒曜石石器も少なく、メソアメリカ的な文化要素は希薄である。従来、ニカラグア太平洋岸からコスタリカ北西部にかけては、後古典期に北からの民族移動の波を受けてメソアメリカ化が進んだと考えられてきたが、この仮説は言語と民族史資料から導き出された。考古学的に検証してみると、「移住」を示唆する文化要素は、多彩色土器に描かれる「羽毛のヘビ」や「風の神」などの図像のみである。オトマンゲ語族のチョロテガやユト・アステカ語族のニカラオがメキシコから移住して、この地域を占拠してメソアメリカ化を推し進めたという、言語と民族史資料から類推される仮説と、それを立証する役割を果たすべき考古学資料の間に齟齬が生じている。

この矛盾は2000年代に入り、ニカラグア湖の周辺遺跡の発掘によって提唱された問題であるが、発表者のマナグア湖畔の発掘遺跡でも裏書された形となった。ただし、資料を見返してみれば、実際には1990年代のコスタリカ北西部のクレブラ湾岸の遺跡で行われた発掘調査や、それ以前のニカラグアのグラナダ地域の調査でも、すでに「後古典期の民族移動とメソアメリカ化」という仮説に相反する資料は提示されている。

おそらく、北からの移民はあったとしても小規模であるか、間接的な形をとった移住であり、当該地域にもたらしたインパクトは限定的で、時を経ずして在地の社会に吸収されたのであろう。ラ・パス遺跡で石造の方形基壇が円形マウンドによっておおわれてしまうという現象はこの点に関して示唆的である。

「マヤ文明の交換、ものづくり、宗教儀礼と戦争：
グアテマラ、セイバル遺跡の石器の通時的研究」

青山和夫（茨木大学）

本研究発表は、セイバル遺跡と周辺部から出土した 86,624 点の石器の通時的研究を通して、交換、ものづくり、宗教儀礼と戦争という、マヤ文明の政治経済組織の一側面を実証的に明らかにする。セイバル遺跡は、グアテマラを代表する国宝級の大都市遺跡であり、国立遺跡公園に指定されている。2005 年からの私たちのセイバル遺跡の大規模な発掘調査によって、マヤ文明の起源と形成に関する重要な成果が得られた。公共祭祀建築は、従来の学説よりも 200 年ほど早く前 1000 年頃に建設されたことが明らかになった。

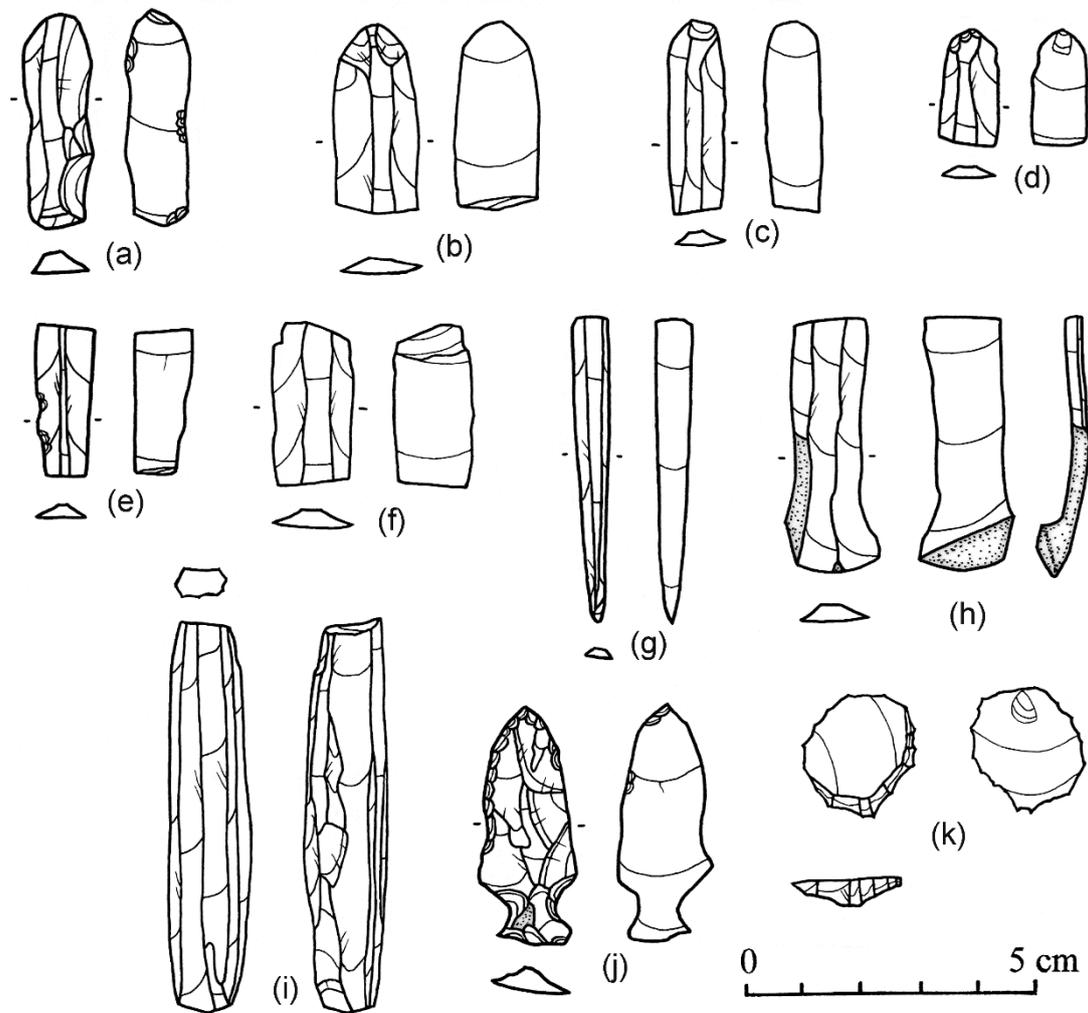
私たちは、セイバル遺跡における先古典期中期（前 1000～前 350 年）の公共祭祀で供物として公共広場に埋納された翡翠などの硬質の緑色石製磨製石斧を中心に、マヤ文明の形成と黎明期の公共祭祀の一端を実証的に検証した。高倍率の金属顕微鏡を用いた分析法によって世界で初めて先古典期（前 1000～後 200 年）のマヤ文明の磨製石斧の使用痕を分析した結果、大部分の磨製石斧が実用品ではなく埋納儀礼のために製作された儀式石器であり、使用済の磨製石斧は全て木の削りに使われていたことが判明した。

セイバルでは、先古典期中期前半のリアル 3 期（前 775～前 700 年）に複雑な政治経済組織が発展した結果、黒曜石製石刃核の地域間交換と押圧石刃の生産が開始された。先古典期中期後半（前 700～前 350 年）には、エル・チャヤル産に取って代わってサン・マルティン・ヒロテベケ産黒曜石の交換が主流になった。黒曜石は石刃核および自然石または自然面を残した大きな石片として搬入され、石刃や剥片が製作された。セイバルの人々は、高度な製作技術が窺われる完形の石刃残核や翡翠製装飾品などの象徴・儀礼的に重要な供物を公共広場に十字状に埋納してマヤの小宇宙を象徴した。

セイバル遺跡では居住の定住性の度合い、価値観やアイデンティティなどが異なる多様な集団が、共同体の公共祭祀及び公共祭祀建築や公共広場を建設・増改築する共同作業によって社会的な結束やアイデンティティを固め、マヤ文明が発展した。公共広場で繰り返し慣習的に行われた埋納儀礼を含む公共祭祀という反復的な実践は、集団の記憶を生成し、中心的な役割を果たす権力者の権力が時代と共に強化された。初期支配層は地域間交換に参加して、黒曜石や翡翠のような重要な物資、観念体系や美術・建築様式などの知識を取捨選択しながら交換して権力を強化した。公共祭祀を形作り物質化したイデオロギーは、地域間交換や戦争など他の要因と相互に作用してマヤ文明の支配層の形成に重要な役割を果たしたのである。

黒曜石の産地では、古典期（後 200～950 年）にエル・チャヤルが再び主流になり、石刃を押圧剥離するために既に整形された、より小さな石刃核として搬入されるようになった。古典期には少量のメキシコ高地産黒曜石製石器が完成品として入手され、支配層が権威を示す威信財として経済的よりもむしろ社会・象徴的に重要であった。戦争の証拠は先古典期

中期の前半から存在するが、古典期後期と古典期終末期のセイバル中心部でチャート製石槍の製作と使用が増加した。このことは、戦争に関連する碑文や図像と共に、セイバルが10世紀に衰退した要因の一つが戦争の激化であった可能性を示唆する。



先古典期中期のセイバル遺跡の黒曜石製石器

「Feline Man/Camelid Woman 再考」

佐藤吉文（国立民族学博物館）

本発表は、ティティカカ湖北方に興ったプカラ文化（前 200 年-後 300 年）の土器図像群を、クロニカおよび民族誌上の動物シンボリズムを駆使して読み直す試みである。

1939 年に Alfred Kidder II によって発掘収集された資料を体系的に分析した Sergio Chávez は、プカラ文化の土器図像を Feline Man と Camelid Woman という超自然的人物図像に関連づけられる二元的ジェンダー枠組みで整理し、プカラ文化の慣習的規則として提示した（Chávez 1992; 図参照）。しかしその枠組みに必ずしも従わない図像もまた存在した。ネコ科動物とヘビである。そこで本発表は、Chávez が十分に咀嚼せずに終わったこの二種の動物の曖昧さについて、クロニカおよび民族誌に示される動物シンボリズムという観点から検討する。

アンデスの神話や説話においてもつばら登場するネコ科動物はピューマ *Puma concolor* とジャガー *Panthera onca* である。そのシンボリズムを検討すると、クロニカにあるパチャクティの即位説話やカパック・ライミ儀礼、そして現代アンデス先住民から採録された説話は、善性／父性／男性性／変身といった要素と高地性のピューマを関係づける一方、低地性のジャガーをこれと対局に置く。ところが現実の自然界を参照軸にそのいずれかと問おうとすると、プカラ土器のネコ科動物は「ありえぬプーマ」あるいは「ありえぬジャガー」にならざるを得ない。対して、自然界に照らしてプカラ文化により馴染みのあるアンデスネコ *Leopardus jacobita* をはじめとする有斑文 4 小型種は、高地にありながらジャガーのようでもある分類不能性に特徴づけられており、それこそが、大型 2 種それぞれのシンボリズムを同所的に引き受ける器を提供しうる。

同様に、ヘビもまたジェンダーシンボリズムの曖昧な存在である。インカの神話はヘビを豊穰性や女性性と強く結びつける。しかし、コリカンチャ神殿内の装飾壁画は天空のヘビとして理解される虹を男性側に配置する。さらに現代ケチュアは、天の川に浮かぶ暗黒星座としてのヘビを *pachatira* と捉え、そこにジェンダーの両義性を認める（Urton 1981）。

こうしてジェンダーという観点から見たとき、二種の動物は互いに置換可能な存在となる。それは、feline-headed snake というヘビの図像の生成原理になるが、それ以上に、「慣習的規則」の二元ジェンダー的理解をも揺るがす。Camelid Woman に対する Feline Man がその胸元に feline-headed snake をいただく時、その人物は「彼＝女」的であり、両者の関係は異なりながらも一方が対となる他方との同質性を保持するヤナンティン（Platt 1986）関係を想起させるからだ。こうして、その慣習的規則は一見分類不能な存在をもそのうちに構造化した全体として成立している。プカラ土器に表現されたのは、「生きられるジェンダー」にとっての二元的ロールモデルではないのである。

Chávez, Sergio J.

1992 *The Conventionalized Rules in Pucara Pottery Technology and Iconography: Implications for Socio-Political Developments in the Northern Lake Titicaca Basin*. Unpublished Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, Michigan State University, Michigan.

Platt, Tristan

1986 Mirrors and Maize: the Concept of Yanantin among the Macha of Bolivia. In J. M. Murra, N. Wachtel, and J. Revel eds., *Antropological History of Andean Polities*. pp.228-259. Cambridge University of Press, Cambridge, UK.

Urton, Gary

1981 Animals and Astronomy in the Quecha Universe. *Proceedings of the American Philosophical Society* 125(2) : 110-127.

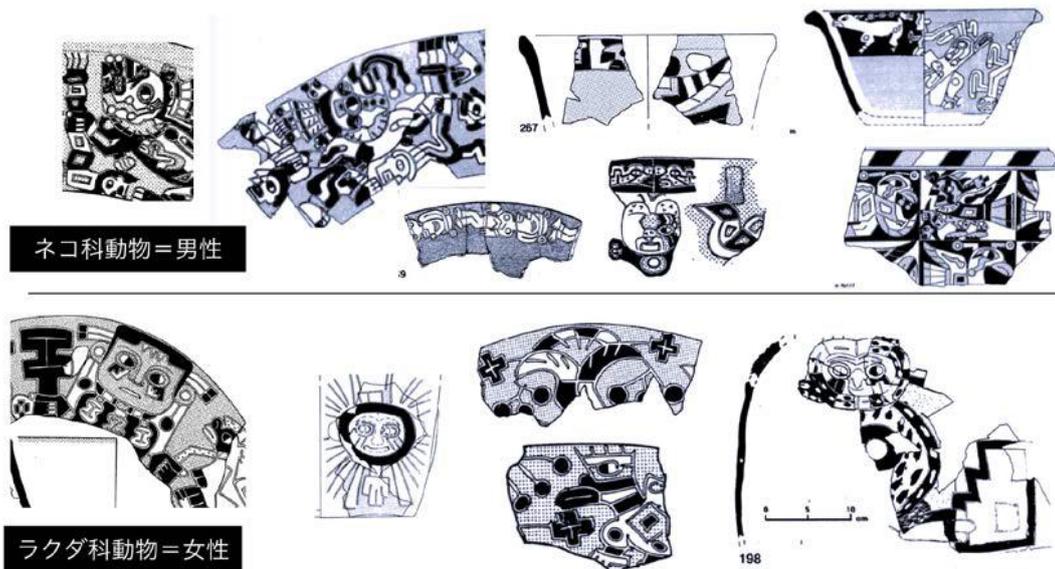


図 プカラ様式土器の装飾に見られる慣習的規則と分類要素 (Chávez 1992より作成)

「鳴るボトル」プロジェクト：
古代アンデスの笛付き土器の X 線 CT 分析、レプリカ製作と実験

真世土マウ（岡山県立大学）

鶴見英成（東京大学）

森下矢須之（BIZEN 中南米美術館）

古代アンデス文明の産んだ工芸品の中に、器内を空気の動きで、内蔵された笛が鳴るボトル型土器がある。我々の「鳴るボトル」プロジェクトは、BIZEN 中南米美術館の収蔵品を中心にその構造と製作技術を研究している。今回は X 線 CT による構造の分析、レプリカの製作、実際に鳴らす実験の結果を示し、製作技術に関する知見とアンデス考古学における本研究の意義を述べる。また研究成果を現代の備前焼作家と共有して新たな創作につなげるなど、文化遺産を活かした地域活性化と国際交流の状況についても紹介する。

孔が一つ開いた球形の「笛玉」がボトル内部に配置され、孔に適切な角度で空気が吹き付けられると音を発する仕組みである。X 線 CT でボトル内部を詳細に分析・計測し、とくに笛玉の多様性、角度、注口・把手・装飾要素との関係に注目し、これらの情報を統合してレプリカを作った。まず陶土同様に造形可能だが 50°C で硬化するインダストリアル・クレイを使い、オリジナルに用いられた製作技法・手順を詳細に検討し、最終的に陶土を焼成して土器レプリカを完成させた。レプリカ分析と作成により破損したボトルの音も再現可能となり、意図された鳴らし方がある程度推察できる。器中の液体が揺れ動くとき空気の流れが複雑化・不連続化し、音の強弱のリズムや倍音が発生し、さらにドーム状のミュートで音質が変わるなど、技巧的な音色を奏でる個体が少なくない。とくに同サイズの胴部二つを管で水平に繋いだ「筒連結・双胴型」ボトルは、鳥のさえずりのような複雑な音が出やすい。

アンデス考古学への現時点での本研究の貢献は、音という不可視の要素が、土器の形態を決定しうることを示した点である。笛玉じたいは外部から見えなくても、例えば「筒連結・双胴型」を多く生産したピクス文化（1～6 世紀）では、意図する音響効果のために土器の全体形状が決定された可能性がある。時期・地域間の比較を今後進める。



（左より）チョレーラ文化の笛付きボトル土器のオリジナル、X 線 CT 画像、レプリカ

「本当に気候変動が中期シカン政体を滅ぼしたのか？

～堆積学的分析による従来説の検討」

松本剛（山形大学）

ガブリエラ・デ・ロス・リオス（ペルー文化省）

野口真利江（株式会社パレオ・ラボ）

門叶冬樹（山形大学）

これまで、シカン遺跡を中心に繁栄した中期シカン政体は比較的短命で 11 世紀末には終焉を迎えたと考えられてきた。島田は主要神殿が燃やされていることに注目し、火が放たれた年代を測定した。いずれの年代も 1100 年頃であり、土器の装飾からシカン神の表象が消える時期と一致することが判明した。貴族にとって最大の権力資源であった神の消失は、彼らによる支配体制の終焉と捉えられた。さらに神殿放棄のタイミングは Thompson らによるケルカヤ氷河のコアサンプルの分析結果が示唆する大規模な気候変動とも一致した。そこで島田は、「約 30 年続いた大旱魃とそれに続く大洪水(メガ・エルニーニョ)による大打撃で自然を司るシカン神への信仰が揺らぎ、灌漑農耕や冶金活動などによって負担を負わされていた一般民衆が反乱を起こし、神殿に火を放った」と説明した。追われた貴族は南西に約 7 キロ離れたトゥクメ遺跡に都を移し、シカン政体は後期シカン期において二度目の繁栄を迎えた。

ところが近年、新しい発見の蓄積や過去データの見直しの結果、島田による上記の説明は必ずしも現実を反映していないかもしれないという疑念が高まっている。まず、シカン遺跡は気候変動による経済不安や社会混乱を乗り越え、放棄されずに持ち堪えた可能性がある。我々が行ったシカン遺跡中心部・大広場での発掘では、後期シカン期に入っても大規模な饗宴や儀礼活動が継続して行われた痕跡が見つかった。また、トゥクメ遺跡は中期シカン期から居住されており、シカン遺跡からの移住者が建設したことを示す直接的な物証は皆無である。さらに、シカン遺跡の神殿に放たれた火の解釈についても疑いの余地がある。この地には古くから儀礼において火を使用する風習があり、ロロ神殿麓の墓地で行われた発掘でも祖先の埋葬後、地表面や供物が繰り返し燃やされた痕跡が多く見つかっている。つまり、神殿に火を放つ行為も終結儀礼 (termination ritual) などの一部であった可能性がある。

ケルカヤ氷河のコアに含まれる砂塵や化学成分、氷の同位体の分析は、アンデス地域における 1500 年の気候変動を一年の時間分解能で示すことを可能にした。しかし、これによってラ・レチェ川流域における洪水そのものの年代が測定されたわけではない。ペルー南部高地のケルカヤ氷河と北海岸のシカン遺跡の間には直線距離にして約 1280 キロ、高低差にして約 5400 メートルもの隔りがある。ラ・レチェ川流域での洪水の有無や発生時期、その影響をより正確に把握するためには、まず考古学発掘と堆積学的分析によって洪水堆積層そのものを特定し、含有遺物の年代測定によって発生年代を明らかにする必要がある。本研究では、詳細な堆積学的分析を通して、中期から後期シカン期にかけての社会と環境の

相互作用とその通時的変化を明らかにすることによって、上記の従來說を検証する。

「古代アメリカ文明の継承者は誰か：博物館展示から考える」

鈴木紀 (国立民族学博物館)

本発表の目的は、古代アメリカ文明の継承者は誰かという問題を、博物館展示の比較を通じて考察するものである。発表者は2014年から現在まで、ラテンアメリカ諸国を中心に24カ国80以上の博物館（美術館を含む）を訪問し、古代アメリカの諸文化に関する展示を観察、分析してきた。

本発表の方法論は、博物館展示を事実の客観的な提示というよりも、異文化の表象と捉え、そこから読み取れる意味を解釈することである。展示の表象としての特徴に気づくためには、複数の博物館展示を比較し、その相違点に着目することが有効である。本発表では、発表者が調査した博物館の古代アメリカ展示を、主に展示場の構成によって比較する。また「征服」および植民地時代に関する解説と、年表についても補足的に比較する。

展示場の構成については、主に次の4タイプが認められた。①古代アメリカ文明のみを展示するもの、②古代アメリカ文明（文化）と植民地時代以降の歴史、③古代アメリカ文明と現代の先住民文化、④古代アメリカ文明と現代の民衆芸術（*arte popular*）。

①は、大英博物館のメキシコ・ギャラリー、メトロポリタン美術館の先コロンブス期アート・ギャラリー、アメリカ自然史博物館のメキシコ中米室等、欧米の大規模博物館と、ペルーの天野博物館やエクアドルのアラバード博物館等、ラテンアメリカのプライベート博物館が該当する。これらの展示では先スペイン期の資料のみが展示され、植民地時代以降の文化の展示がない。そのため来館者は、古代アメリカ文明の継承者について考える機会を与えられず、仮にそれを疑問に思っても展示に答えはない。

②は、ペルー国立考古学人類学歴史学博物館、コロンビア国立博物館、チリ国立歴史博物館、エルサルバドル国立人類学博物館、コスタリカ国立博物館等、ラテンアメリカ諸国の国立博物館が該当する。しかし先スペイン期文化と現代の国民との関係は、博物館によって解釈が異なる。ペルーでは、アマゾン地域を除いて、植民地時代以降、先住民族文化が西洋文明に代替されたという説明がなされている。したがって古代アンデス文明の継承者が誰であるかは明確にされていない。一方、その他の国では、植民地時代の混血者の誕生や先住民族の存続、移民の到来などが示され、古代アメリカ文明（文化）は多様な文化的背景をもつ当該国の国民の文化遺産として位置付けられていることが多い。

③は、メキシコ国立人類学博物館とグアテマラ国立考古学民族学博物館が該当する。これらの博物館ではメソアメリカ文明を紹介する考古学展示と、現代の先住民族の民族誌展示が共存するが、植民地時代の展示を欠いている。そのため、現代の先住民族が古代アメリカ文明の継承者として想定されていることがうかがえる。

④は、メキシコの民衆美術館、ペルーの国立ペルー文化博物館の2館である。これらの博物館では、民衆芸術を先住民族文化と外来文化の混成（メスティサヘ）の所産と位置付け、先スペイン期の工芸品が現代の民衆芸術の一つのルーツとして展示されている。

以上のように、博物館展示を比較すると、古代アメリカ文明の継承者は、1)不明もしくは不在、2)文化的に多様な国民、3)現代の先住民族、4)混血文化をもつ民衆、といった答えを見つけることができる。